

Ⅶ 非言語的アプローチ

39 コラージュ療法

長坂正文

1 到達目標

- (1) 非言語的な表現方法であるコラージュ療法の特徴を理解する。
- (2) コラージュ療法の留意点に注意しながら実施できるようになる。
- (3) 制作されたコラージュ作品の理解・解釈がある程度できるようになる。
- (4) コラージュ療法を学校現場で活用できるようになる。

【キーワード】

遊戯療法，非言語的表現，容易，弱い抵抗，解釈不要

2 コラージュ療法の特徴

言語面接を補うものとして、非言語的手法の利用は有効である。中でも、コラージュ療法は実施が「簡単でかつ表現が多様」であるところは、箱庭療法と同様な特徴を持つだけでなく、場合によっては箱庭療法よりもすぐれている面もある。例えば、箱庭療法より実施する抵抗が弱い、これは、切り貼りするだけという簡便さに加え、箱庭療法には砂や玩具に触れるということが「不潔である・幼稚である」と受け取られる場合があるからだろう。しかし、コラージュ療法にはそのような抵抗もなく、実施すると、大人であっても、子どもに返ったような楽しい気持ちや充実感・満足感を味わうことができる。このように、コラージュ療法は、表現すること自体に意味がある。

他にコラージュ療法の特徴といえば、各表現は「一度限り」という限定があることである。一度使用した写真や絵などの素材は、二度と使えない（同じ素材が複数あれば別であるが）。この意味では、「一期一会」的な出会いがあるととらえてもよいだろう。また、箱庭療法と異なり、作品そのものを残しておくことができる、つまり記録としての整理が簡単かつ確実であるという点も利点として挙げられる。

さて、コラージュ療法の歴史について少し紹介しよう。美術のコラージュは、20世紀初頭に、ピカソやブラックなどのキュビズムの「パピエ・コレ (papier collé 貼り紙)」から始まり、「本来相応関係のない別々の映像を最初の目的とはまったく別のあり方で結び付ける技法」のことである。以後、ダダイスト、シュールレアリスム、ポップアートへと受け継がれていき、現在に至っている。いっぽう、治療法としてのコラージュ療法は、日本では、1987年の森谷が学会レベルでは初めのようなのだが（森谷寛之「心理療法におけるコラージュ(切り貼り遊び)の利用」第126回東海精神神経学会，静岡），実際には1970年

代に行われていたようだ（森谷ら「座談会 コラージュ療法の起源と発展」P6）。

なお、以下の記述においては、特に断りのないかぎり、小学生から高校生までの年齢の子どもを「児童・生徒」と記す。また、保護者などの大人の実施も想定されて「クライアント」と記すべきところも、倣って「児童・生徒」と記すので、必要に応じて「クライアント」と読み替えていただきたい。

それでは、ここでコラージュ療法の特徴をまとめておこう。

①非言語的な手法である

問題を抱えた児童・生徒は言語表現が苦手であることが多い。また、考えや気持ちを尋ねたとしても、自分自身のことがよく分からないこともある。そこで、コラージュ療法を利用することで、言葉を発しなくとも、また、自分自身の内面がよく分かっているか、何らかの表現が可能となる。

②表現することに意味がある

コラージュ療法では、児童・生徒が表現することに意味があり、表現することで「カタルシス」や「癒し」の効果がある。したがって、児童・生徒に対して解釈を伝えることはほとんど必要がない（箱庭療法でいう「味わう」態度と同様）。それどころか、解釈を伝えることは、難しいだけでなく、治療的観点からみると好ましくないという考え方もある。

③実施が簡単で抵抗が少ない

用意するものも画用紙と写真や絵だけであり、場所も選ばない（例えば、家庭訪問した場合でも実施が可能である）。また、描画などが自身で全てを表現しなければならないのに対して、コラージュ療法では、既製の写真・絵・キャプション（文字のこと）を選び、画用紙に貼り付けるだけでよい（レイアウトを考えることは必要であるが）。このことから、コラージュ療法への抵抗はあまりみられないのである。

④1回限りの表現である

コラージュ療法に使用する素材は、写真・絵・キャプションであるが、基本的にはどの素材も1回限りしか使用できない。素材は雑誌やポスターなどから切り出すことが多いが、それらの雑誌やポスターなどは1部しかないことが普通だからである。だから、一度使ってしまったら、同じものは使えないことになる。このことは、表現を制限するように思われるが、コラージュ療法はそのような制限を超えて無限の可能性も持っている。

⑤整理が簡単である

コラージュ療法は、1枚の画用紙に作品が収まり、作品そのものを保存しておくことができるので、整理が簡単である。例えば、箱庭療法が作品そのものを保存することができないため、写真を撮る必要があることと比べればよく分かるだろう。

3 コラージュ療法の準備

(1) 画用紙

サイズはいろいろあり、A4、B4、八つ切り、六つ切り、四つ切りであり、特に決まっていはいない。入手しやすさ、携帯・保存のしやすさ、表現スペースとしての程良さなどを考慮すると、「八つ切り」（サイズはB4よりやや大きい）が適当であろう。A4であると小さいし、四つ切りだとかなり大きめである。しかし、エネルギーの低下している児

童・生徒には、意図的にスペースの小さな「A4」を使用するほうがよいこともある。

(2) はさみ・カッターナイフ

はさみは必需品である。多くの場合は素材を児童・生徒自ら切るし、たとえ、あらかじめ素材が切ってあっても、形やサイズを合わせるために、さらに切ることも普通だからである。また、はさみはあまり大きくなくともよく、小型で先がとがっていないほうがよい（安全のためと、心理的不安を惹起させないためである）。

カッターナイフは、雑誌などを切り抜くときには、はさみでは使いづらいのであったほうがよい。これも、はさみと同様で小型が好ましい。

(3) のり

素材を貼るのに、のりが要る。使いやすさを考えると、スティック状のものが便利である。できれば接着力が強いタイプがよい。接着力が弱いと、時間が経つと素材が剥がれてしまうからである。

(4) 素材

画用紙に貼る素材は、写真・絵・キャプションである。これらをいろいろな種類を取り混ぜたくさん用意する（表現の可能性をある程度保障するためにも、人間、動物、植物、乗り物、建物、衣服、アクセサリ、食べ物、宗教的なものなど、ひととおり揃えたい）。素材は、あらかじめ切り取ってあってもよく、雑誌やポスターをそのまま用意しておいて児童・生徒に切り取ってもらってもよい（詳細は後述）。

4 コラージュ療法の実施

(1) 時間

実施時間は特に制限はないが、実際に制作にかかる時間は人によっておおよそ10分～40分程度の幅があり、平均20分ほどである。もし、時間が十分取れないか、児童・生徒が時間をかけていて実施時間内に完成しなければ、一時中断して次回に続きを行ってもよい。

(2) 実施法

コラージュ療法の実施法は、主に3つある（コラージュ・ボックス法、マガジン・ピックアップ・コラージュ法、折衷法）。共通するところも多いが、ここでは便宜上分けて説明する。

A：コラージュ・ボックス法

箱の中に、適当に切り抜いた素材を入れておく（50～100枚程度）。この中から児童・生徒が好きなものを選び、画用紙に貼る方法である。素材は、必要に応じてはさみで切ってもよい。

<教示>ここにある切り抜きの中から適当に絵を選んで、画用紙に貼りつけてください。

<メリット>

- ①あらかじめ素材が切っているので、素材を選びやすい。
- ②製作時間が短縮できる。
- ③あらかじめ素材の選別ができるので、避けたほうが好ましいイメージ（暴力や性的な表現など）を除くことが可能である。
- ④素材のみを持ち運ぶだけであれば、携帯性にすぐれており、家庭訪問でも実施がしやすい。
- ⑤年齢が低い場合やエネルギーの乏しい児童・生徒でも実施が可能である（これは、他の二つの方法にも共通する）。

<デメリット>

- ①素材の数、種類に限られる。
- ②素材を切り抜く手間がかかる。

<工夫>

- ①その児童・生徒が関心のありそうな素材を探す。
- ②制作に関心を持ちつつ、カウンセラーが新たな素材を切る作業をすることも可能である。

B：マガジン・ピクチャー・コラージュ法

雑誌（カタログ）を数種類用意し、児童・生徒は、雑誌から好きな素材を選び自分で切り抜き、画用紙に貼る方法である。雑誌の種類は、女性誌、男性誌、子ども雑誌のほか、科学（宇宙）、自然（風景）、動物、旅行、歴史、スポーツ、車、料理など幅広く用意する。児童・生徒が自分から雑誌を持参して素材を切り取って使用することも認めてもよい。

<教示>ここにある雑誌やカタログの中から適当に選んで切り抜いて、画用紙に貼りつけてください。

<メリット>

- ①児童・生徒の主体性を重んじ、選択の幅が広く、それだけ表現の可能性が広がる。
- ②素材を探すために時間をかけることで、時間を適度に潰すことができる。そのため、児童・生徒は無理に製作しなくともよく、また話さなくとも雑誌に目を通していてもできる。
- ③持参した雑誌が児童・生徒の理解の手がかりとなる。

<デメリット>

- ①素材を選ぶのに時間がかかる。
- ②持ち運びが難しくなる（素材となる雑誌がダンボール箱いっぱいになることもある）。

<工夫>

- ①雑誌に偏りがないようにする。

C：折衷法

コラージュ・ボックス法とマガジン・ピクチャー・コラージュ法を併用する方法である。つまり、箱の中に用意された素材と雑誌の両方を使用する。

<教示>ここにある切り抜きの中から適当に絵を選んだり、雑誌やカタログの中から適当に選んで切り抜いたりして、画用紙に貼りつけてください。

<メリット>

- ①素材の選び易さと、自由度の高さが共存している。
- ②児童・生徒が製作中に並行して、素材を切り抜き追加することもできる（児童・生徒を意識して意図的に素材を選ぶこともできる）
- ③携帯性にすぐれており、家庭訪問でも実施が可能である。

<デメリット>

- ①素材を選ぶのに時間がかかる。

<工夫>

- ①筆者は、携帯することも考えて、箱には100枚程度の素材、雑誌は10種程度、これに八つ切り画用紙と、はさみ、のり、カッター、サインペン、ボールペン、色鉛筆、クーピーを一つのバックに入れておいて利用する。

（3）応用

コラージュ療法の応用もいろいろとあるが、ここでは特に①の「相互法」をお奨めしておきたい。学校場面で行うとすると、ごく自然なやり方であると思われるからである。

①相互法（同時製作法）

児童・生徒とカウンセラーが同時にそれぞれのコラージュを製作する方法である。お互いに自分自身のことにある程度専念できるので、児童・生徒が見られてやりにくいという抵抗を減らすことができる。杉浦（1999）はそこで体験する時間を、「静かな充実した共有の時間」と表現している。

また、カウンセラーの作品により、児童・生徒へメッセージを込めることが可能である（自然にそうになってしまう）。

②合同法

母子、あるいはこれにカウンセラーが加わり、二人か三人で一つの作品をつくる。低学年の児童ではこのような方法がよい場合もあるだろう。こうすることで、児童はコラージュを制作する力を得ることができ、母子間の力動を理解したり、実施者との交流を促進したりする。その後は、児童が一人で制作するような展開となることが多い。

③宿題法（自主製作法）

面接時間が少なくその場の製作が困難である場合、家でコラージュを製作してもらう方法である。あるいは、児童・生徒が自主的に家で製作して面接時に持参するという方法もある。

（4）完成後

コラージュ作品が完成したら、児童・生徒に感想を尋ねる。そしてカウンセラーは素朴な感想程度（すごいね、すばらしいね、きれいだね、力強いね、など）を伝える。どんなものができたのか説明をしてくれることもあるが、カウンセラー側から、分かりにくいものがあれば説明を求めてもよい。筆者は、貼られている素材をひとつずつ確認していくことが多い。

基本的には、コラージュ作品の解釈を児童・生徒に伝えることはしない（カウンセラーが後に自分だけで解釈するのは自由である）。もし伝えるとしたら、先の素朴な感想に加えて「これはあなたらしさが出ているような気がします」「これはあなたには大切なイメ

ーじなんでしょうね」くらいの感想や、もう少し踏み込んで、「これはあなたの大切な問題を表現しているかもしれません」「これはあなたの繊細で傷付きやすさを表しているかも」「人が気になるんでしょうか」などのようなやや解釈めいた言葉をかけることも意味があるだろう。

また、題を求めてもよい。児童・生徒によっては、「南の島」「今、欲しいもの」「危険な香り」など、分かりやすいものから抽象的なものまでいろいろである。

(5) 記録

記録は、まずコラージュ作品そのものである。裏に、実施年月日、児童・生徒の名前（場合によってはイニシャルとする）、児童・生徒の言った題などを記入しておく。また、カウンセラーの記録としては、コラージュ制作の過程・感想・カウンセラーとのやり取りなどをノート（記録用紙）に残しておく。

5 実施上の留意点

(1) 時間と制作方法

森谷は「コラージュ・ボックス法」を15～20分でするという立場をとり、杉浦は「マガジン・ピクチャー・コラージュ法」を用い、1時間の面接では、45分で作り後は前後に話し合いの時間とするという立場をとる（森谷ら、1993）。時間の違いは、コラージュ・ボックス法ではあらかじめ素材が切っているので、選ぶ時間が短縮できるのに対して、マガジン・ピクチャー・コラージュ法では、雑誌から素材を選ぶのに相当な時間がかかるからである。

つまり、短時間で実施する場合や、言語面接も実施したい場合には、コラージュ・ボックス法のほうが向いているともいえる。しかし、時間内に作品を完成させることが目的ではなく、あくまでも児童・生徒の表現を促進することが目的なので、その意味では、マガジン・ピクチャー・コラージュ法の「ゆっくりペース」や「自由度の高さ」を優先したほうがよいこともあるだろう。

(2) 切り貼り以外の表現

児童・生徒によっては、素材の切り貼り以外に、色鉛筆やクーピーなどで色を塗ったり、書き加えることを希望する場合がある。基本的には希望を認めて、自由に表現させてかまわない。そのようにする児童・生徒の心理（こだわり）や感性を、そこから理解する手がかりともなる。

(3) 1回の面接時間内にできなかった場合

時間が限られている、あるいは50分の時間があったとしても、コラージュ作品が完成しない場合がある。このようなとき、制作途中の作品を預かり、次回に続きをするという方法もある。あるいは、児童・生徒に持ち帰ってもらい、家で完成させて、次回に持参してもらうという方法もある（先述）。

学校という場を考えると、前者の「預かって次回続きをする」のがよいのではなかろう

か。

(4) 児童・生徒がコラージュ作品をほしいと言う場合

コラージュ療法の目的は、児童・生徒の表現の促進、問題解決であるので、記録のために作品を保管することは二次的な問題である。そこで、児童・生徒がコラージュ作品をほしいと言う場合は、持ち帰ってもらってよい。ただし、記録のために写真を撮らせてもらっておく。

6 コラージュ作品の見方

コラージュ作品の見方については、今のところ標準化されたようなものはない。基本的には、箱庭療法の箱庭作品の見方と似たようなものとなる。

(1) 印象

全体から受ける印象である。色使い、柔らかさ、ゆとり、生命感、エネルギー感といったような観点から印象をとらえてみる。

例えば、「暖色が多い」のは、エネルギーの高さ・高揚感を表し、逆に、「寒色が多い」のはエネルギーの低さ・うつ的な気分を表す。「柔らかな感じ」は、やさしさ・繊細さ・女性性などを表し、「びっしりと貼られたゆとりのなさ」は、不安が高いか、強迫的な傾向を表す。

(2) 題（テーマ）

児童・生徒が付けた題も手がかりとなる。先に例に挙げた「南の島」「今、欲しいもの」「危険な香り」という題から、それぞれ児童・生徒の心境を推測することができる。「南の島」「今、欲しいもの」というような題は、考え方がポジティブで健康度が高い。「危険な香り」という題は、能力が高く、個性的で、人と変わったことを好む傾向がある。

また、児童・生徒が付けた題とは別に、テーマという観点からみることができることがある。例えば、素材の中で特徴的なものや、シリーズとしてコラージュ作品をみた場合、共通したテーマ（例えば、「破壊」「救い」など）を感じさせることがある。

(3) 素材

素材の中でまず注目すべきは、「強調されている」「数が多い」ものである。それだけ児童・生徒の意識がそこに集中しているということであるので、心情を知る手がかりとなる。例えば、「たくさん貼られた食べ物」は、愛情希求を表している。

また、「独特な表現」にも注目したい。そこに児童・生徒なりのこだわりがあるからである。例えば、「男性と女性を切り貼りして合体させる」は、性的アイデンティティの混乱があるのかもしれない。

さらに、「ないもの」を考えることも有効である。よくあるのが、動物ばかりで、「人間がない」場合、対人関係が苦手であることが多い。

(4) 構成力

構成力とは、コラージュ作品が全体的にまとまっているかどうかである。まとまっていれば、自我の力が強いとみることができ、逆にまとまりがなければ、自我の力が弱いとみることができる。

(5) 空間配置

素材が画用紙という空間のどのような位置に貼られるかや、方向性の有無で意味を考える。その判断基準となるのが、バウム・テストの解釈で利用される「空間象徴図式」(Koch, 1952)である。これは、空間を上下と左右で分け領域を4分割し、上下を空間軸としてとらえ、上を「意識・精神」、下を「身体・無意識」という意味づけをする。同様に、左右を時間軸としてとらえ、左を「過去・退行」、右を「未来・現実」ととらえる。

また、素材の向きや動きが、どの方向を向いているかということも、空間軸・時間軸を基準とした意味づけを考える。例えば、「右方向への動き」があれば、児童・生徒の姿勢が前向きになってきたとする。

(6) 自己イメージ

素材の中に、児童・生徒の自己イメージといえるものがあることが多い。例えば、「犬や猫などの小さい動物」「泣いている赤ちゃん」「冬の林」などである。これらは、そのような素材を使って、自分自身の姿や心情を投影してといえるだろう。

(7) 切り方・貼り方

素材の切り方や貼り方も、児童・生徒を知る手がかりである。素材を非常に丁寧に切り取る場合は、神経質傾向や強迫性がある。逆に、ざっくりと素材を切り取り、貼り方も多少歪んだり、はみ出たりしても気にしない場合は、心にゆとりがないか、おおざっぱな性格ととらえることができる。

7 おわりに

コラージュ療法のような非言語的な表現方法の活用を取り入れると、教育相談に幅が広がるだけでなく、なによりも児童・生徒にとって利用しやすいので、是非多くの方に身につけてほしい。また、文献を読んだだけで満足することなく、コラージュ療法の事例研究会に参加して実践的な力をつけていただくことを願っている。

8 演習

(1) 実際にコラージュを行おう

- ・完成したら、二人一組になり、お互いに自分の作品について感想を言い合おう。
- ・話し合った内容について、全体で共有してもいいと思うものがあったら、発表しよう。

- (2) 学校現場に導入するとすれば、どのような方法があるか話し合おう
・二人一組で話し合い、それを全体で共有し、活用方法について考えてみよう。

《参考引用文献》

- Charles. Koch (1952) : The Tree Test. Verlag Hans Huber, Bern. (林勝造・国吉政一・一谷
 疆 訳『バウム・テスト—樹木画による人格診断法』日本文化科学社, 1970)
 森谷寛之『コラージュ療法実践の手引き その起源からアセスメントまで』
 金剛出版, 2012
 森谷寛之・杉浦京子・入江茂・山中康裕編『コラージュ療法入門』創元社, 1993
 森谷寛之・杉浦京子・近喰ふじ子・服部令子・入江茂「座談会 コラージュ療法の起源と
 発展」森谷寛之・杉浦京子編『コラージュ療法』現代のエスプリ 386 至文堂 PP.5-28
 長坂正文「表現療法 (スクリブル・コラージュ・箱庭)」月刊学校教育相談編集部編『相
 談活動に生かせる 15 の心理技法』ほんの森出版 pp.66-75, 2004
 杉浦京子「同時製作法」森谷寛之・杉浦京子編『コラージュ療法』現代のエスプリ 386
 至文堂 pp.70-71, 1999
 山中康裕編著『心理療法プリマーズ 表現療法』ミネルヴァ書房, 2003